

2010 Students Forum in Yakutsk

GCOE 海外リエゾンオフィスが設置されているロシア・ヤクーツクで、学生フォーラムを開催しました。現地では昨年 2009 年 8 月にはヤクーツク市郊外のスパスカヤパッド実験林で国際野外実習を開催し、また 2010 年 3 月にはヤクーツク大学において生物地球化学の集中講義形式のコース“Biogeochemical cycles of permafrost ecosystems in a changing climate”を開催し、現地の学生との交流を進めてきました。今回の学生フォーラムは、夏期の現地調査観測の機会を利用し、北大環境科学院の学生が企画運営しました。

フォーラムは、2010 年 7 月 7 日と 11 日の 2 回実施しました。北大側は、ロシア観測のため現地を訪れた 7 名の学生、岩花 GCOE 特任助教と杉本。フォーラム 1 回目はロシア北東国立大学 North Eastern Federal University (旧ヤクーツク大学 Yakutsk State University がロシアの国立大学重点化により改名) の生物学科の野外実習が行われているキャンプ地のカタリックで実施し、ロシア側からは実習に参加していた 3 年生と 4 年生の学生約 100 名が参加しました。2 回目は 7 月 11 日にリエゾンオフィスが設置されている IBPC のホールにて行い、ロシア北東国立大学の学生の他、ロシア科学アカデミーの研究所や、NGO の市民環境保護団体からも参加がありました。

以下は、企画運営を行った北大環境科学院学生による報告と参加感想です。

(杉本敦子)



<企画者のコメント>

○修士課程1年 千葉庸平のはなし

■ ロシアで行った学生フォーラムとは

今回企画した学生フォーラムは「環境とは何か？」をテーマとして「両国の身の周りの環境変化」、「行っている環境対策」など日本の学生とロシアの学生が議論を交わしながら交流を深めることが目的であった。参加者は我々北海道大学から調査に来ている学生と主にヤクーツク大学の学生である。

私はこのイベントの企画を担当した。企画の準備が遅れ、周りとの連携もうまくいかなかったため、イベント開催寸前までバタバタしたが、通訳などロシアの学生の協力も得ることができ、テーマに関する議論はなかなかいいものができたと思う。この反省を糧にして今後に生かしていきたい。

今回は開催した学生フォーラムのその一部を紹介する。



■ 日本人は客寄せパンダ？

知らないことには興味を持つ。興味のないことはすぐに忘れてしまう。つまり興味は知識の蓄積を生む。ロシアでは日本の映画やドラマ、漫画が多く配給されていることもあり、ヤクーツク大学の学生にとって違う国の流行モノ、同世代の学生のライフスタイルは相当な興味を生んだようだ。とにかくアイドルのようにカメラを向けられた。

第一回目はヤクーツク大学の学部生が40日間のサマーキャンプを行っている所で開催した。レナ川近くに設置されたキャンプサイトには大小30以上のテントが建てられ、約100人がそこで共同生活をしている。お風呂もまともに入れられない生活が40日間も続くにも関わらず、女子学生も多く参加していた。むしろ女子学生の方が多かった。もし、日本で同様なサマーキャンプを開催したら、おそらく女子大生はなかなか集まらない気がする。日本に帰り、友人に「もし、40日間のサマーキャンプあったら参加する？」と尋ねたところ、「いや、普通に無理でしょ」と言われた。「普通に」って何？と思ったが、日本の学生にとっては参加しないこと





が普通で、ロシアの学生にとっては参加が普通ということなのだろうか。

以下はフォーラムの簡単な内容である。

●環境とは何か？

環境は主体に対する客体である。環境は何を主体にするかによって、その環境が良い環境なのか、悪い環境なのかが決まる。例えば、日本の富栄養化した湖沼にはしばしばアオコが発生することがある。アオコが発生すると異臭を発生し、人間社会においては観光事業などに影響を与えるため、人間はそのアオコを減らそうと努力する。アオコが発生した湖沼の環境は人間にとっては悪い環境であり、アオコにとっては良い環境である。つまり、先にも述べたようにその場の環境の良し悪しは何を主体にする

かで決まってくる。そして、人間は「環境」を考える時、人間を主体として考えることが多いのである。

●環境対策

日本の企業や学校が行っている環境対策を紹介した。ゴミの分別に冷暖房の温度設定による節電、太陽パネル発電などを紹介した。ヤクーツク大学で同様な環境対策は行っていなかった。ヤクーツク大学の学生は積極的に付近のゴミ拾いをしているようだ。これは身近な環境を良くするために行われ、ゴミ拾いは身の回りの環境の改善に直接的に作用する環境対策であるといえる。日本で行われている環境対策の多くはその活動がどれだけ身の回りの環境に作用しているのかを本人たちが理解しにくいものが多い気がした。実際に理解しながら行っている人は少ないと思う。この点に関して、次のような要因が考えられる。我々の身の回りにおいて危機的環境変化を感じる機会が少ないことである。最近、日本でも異常気象などの環境問題がテレビや新聞で多く取り上げられる。しかし、実際にその環境状況に置かれていない人たちにとってはメディアを通じてその状況を理解するだけである。さらには、異常気象のような問題はグローバルな問題も絡むので対策の取りようがない。つまり自分の身の周りに特に困った環境変化は感じられない。しかし、インターネットなどの普及によりメディアを通じて日本や世界における環境の異変の情報を多く耳にする。そこで自分達が行っている環境対策が環境問題の解決にどの程度作用するかわからないが、少しでも役に立っていると信じて行っている人が多い。逆に、ヤクーツクの学生にとっては世界の環境問題の前にゴミの問題など身近

な環境問題を解決することが先決であるため、環境の改善に直接的に作用し効果がわかりやすい環境対策が行われていると考えられる。

■パンダの人気はどこへやら

第二回は日本側の発表のほかにヤクーツク大学の学生がロシアの環境問題について発表し、前回と同様に議論を行った。ヤクーツクの市民はやはり大気・土壌の汚染、ゴミの問題、産業廃棄物、医療廃棄物など身の周りの環境問題を重要視していた。いつしかの日本の環境問題をそのまま受け継いだようにも思えた。そして、ロシア側は日本が昔、そのような環境問題を抱えていたことは知らなかった。日本がその環境問題からどのように解決したのかを多く質問された。その他多数質問があったが、その中で気になった質問があった。「大学にある太陽パネル発電はどの程度電気を供給していますか？」誰も正確に答えることはできなかった。やはり私たち日本人は様々な環境対策を日々の中で行っているが、

多くの方がどの程度環境に作用しているのか知らないで環境対策を行っているのだと再確認した質問であった。議論終了後、前回のパンダ人気はどこへやら、静かにお茶会は終わりを告げた。



■追記

今回は私にとっては初めての海外調査であった。やはり一番に感じることは、英語によるコミュニケーションである。今後社会にでるにあたり、公用語を英語にする企業が増える今、最低限英語はしゃべれるようにしなければいけないと感じた。

調査においては、暑さとの戦いであった。気温は30℃を超える中、蚊がたくさんいる森の中では、肌を露出できない。そのため汗だくになりながらサンプリングをした。汗だくのあとのお風呂は格別だが、結局2週間に一度しかバーニャ（蒸し風呂）に入ることができなかったことがこころ残りである。



<他の学生及び特任助教のコメント>

○博士課程2年 上田哲大のはなし

今回の学生フォーラムであるが、議論の内容であった「環境問題」について、日本の学生の認識とヤクーツクの人達の認識とがはっきり異なっていた、ということを知ることができた良い機会であったと思う。世界各地で環境対策が謳われている現在、日本でも企業等を中心に様々なエコ対策がされている話を耳にする。現在、日本の自分達の世代では、地球温暖化等の目に見え難い変化に対しての意識が強い。それに対し、ヤクーツクでは現在、森林火災や水質汚染・パイプライン等の問題など自分達の身の回りの環境に大きな関心を寄せており、何処か、かつて経済的な成長期に公害問題を抱えていた日本のことを連想させた。現在の日本（例えば札幌）では水道水を普通に飲める等、インフラ等の設備が整ってしまったが為に、逆に身近な問題に対して目を向けることが少なくなっている。それに対してヤクーツクは内陸でかつ永久凍土帯という特殊な環境下にある為、物資の輸送や技術的な面から、インフラ等の設備が整うのに相当の時間を要すると思われる。ヤクーツクに赴くのは今年で5回目となるが、現在街の中心部は年を経る度に煌びやかになっている。それでも、大通りから少し離れると築幾十年と感じさせる古びたアパートが立ち並び、街の外れまで行くと木造の家屋が目立つようになる。仮に下水処理施設等のインフラの設備が完全となり、水道水を飲んでも問題ない日が来れば、ヤクーツクの人達も地球規模の環境問題に目を向けることになるのだろうか、と、そんなことを思ってしまった。

○博士課程2年 Alexandra Popova のはなし

I think the forum that was held this summer was a wonderful opportunity for young people from different countries to exchange their points of view. During 2 meetings of people of different age and specialty various ideas and issues were discussed. It showed something in common and other things from all the other sides. Personally, I liked the idea of thinking in global scale but acting in local. Russian students were interested very much to meet their foreign colleagues of same age and same interests. I hope such events to be held on more regular basis to improve mutual international exchange of ideas and experience.

○博士課程1年 鄭峻介のはなし

今回、2010年7月7日と11日にロシア・ヤクーツクで行われた学生フォーラムに参加し、いろいろと感じるものがあった。

特にヤクーツクの学生達の地域的な環境問題に対する意識の高さに驚き、日本の学生との違いを感じた（もちろん、環境問題に対する意識の高い日本の学生の方もいるのは知っています）。

地域的、及び世界の環境問題を知識として学ぶのみではなく、それを感じ、高い意識をもつことも非常に重要であることを再確認させてくれたヤクーツクの学生に感謝！！

スパシーバ。。。。

○博士課程1年 Liang Maochang のはなし

Russian students are very clever, lovely and passionate. They showed warm welcome to our visit. It is really a good memory for the enjoyment of talking and sharing experience with them.

The observation of taiga-tundra ecosystem in Chokurdakh is most of importance for its unique and natural landscape. The research has great meaning to help illustrate global warming effects on the high latitude ecosystem. I prefer to do more work in this place.

○修士課程1年 新宮原諒のはなし

最も印象に残っているのは、ヤクーツクの方々が環境を自身の生活に直接関わる問題として捉えていたことです。水・土壌・空気の汚染、ゴミの問題が挙げられましたが、特に水質については2日目の学生フォーラムでこのような例が出ました。ヤクーツク付近を流れる大河のレナ川を横断する石油のパイプラインが、最近の半年間で3度も破裂しているということです。

○学部4年 鷹野真也のはなし

まず水道水が飲めないということに驚きました。それだけでなく日本とはライフスタイルや生活環境があまりにも違います。このことから環境に対する意識・価値観の違いが生まれてくるのかもしれませんが。実際フォーラムでの発表内容も、ヤクーツクでは環境問題をグローバルなものではなく、汚染や公害などの身近に起きるものとして捉えていました。日本では多くは前者として捉えているでしょう。文化の違いを感じました。

◎岩花先生の話

今回の学生フォーラムは、杉本研のメンバーにとっても初めての試みであり、手さぐり状態の準備・開催となった。ロシアの大学生にとっては夏休みで人が集まりにくく、また杉本研の調査日程も厳しい中の開催で十分な集客ができなかったことは残念だったが、日露双方にとってお互いの環境意識の把握にある程度は役立ったと思う。

今後も形を変えてこのようなフォーラムは杉本研でもどこへ行っても催されるはずなので、会の仕切りを任された人は、ただ言われたことをこなすだけではなく、会全体の成功のために積極的に動くように努力してほしい。また、一人で準備できない部分は他の人に手伝ってもらえるように手配するリーダーシップも期待したい。

海外のフィールド調査にあこがれて杉本研に来た学生が多いと思うが、研究室に閉じこもって一人研究をするのとは違い、現地での人とのコミュニケーションは文系・理系に関わらずフィールド調査の基本である。少なくとも英語による意思疎通の努力を放棄するようでは今後の発展は限定されると思う。フォーラムに参加する以上、また、海外のフィールド調査に参加する以上、ヤクーツク側の参加者達を見習って積極的に自分から人に話しかけ、本音を語り合ってほしい。客寄せパンダで終わるのはあまりにもさびしい。